

本書は、上智大学英語教授法コース(2006年開設)の取り組みを解説することを主たる狙いとし、二部の構成になっている。第一部では、コースの目的と内容を包括的に概説するだけでなく、個々の担当科目について、担当教員自ら読者に語りかけるという工夫を行っている。それによって、上智大学の英語教授法コースが目指すべきヴィジョンとミッションが示され、教員の熱いパッションが感じられる内容構成になっている。

そして第二部では、このコースを牽引する5名の教員がそれぞれのユニークな視点で応用言語学の問題を捉え、執筆した6本の先端研究論文が紹介されている(ここでも論文の末尾で詳細な教員紹介が行われており、各人の専門分野だけでなく人柄までを感じ取ることができる)。論文のタイトルを紹介すると、「これからの日本の英語教育の方向性」(吉田研作)、「TKT (Teaching Knowledge Test) で見る言語教員に必要とされる資質と技能」(渡部良典&ジェイソン・マケヴォイ)、「英語学習のビリーフ、学習方略、そして獲得した能力の自信度についての研究」(和泉伸一)、Preparing Japanese Learners of English for Study Abroad: What's missing? (リサ・フェアブラザー)、Challenging Hegemonic Discourse: Oral Proficiency = English Proficiency? (坂本光代)、「日本語英語教育向上を目指して: 現状と課題」(坂本光代・渡部良典)の6本である。

これらの論文は、英語教育の現状を批判的に検討した上で、核心的イシューを提起し、それぞれについての問題解決の糸口を示しているところに共通性がある。例えば、“native-like competence”を英語の到達目標にする一般的な見解について、坂本・渡部は「英語を教えることに従事している人には、英語を効果的に教えることだけでなく、複言語主義に基づいた日本人の英語、そして英語を介した日本人の国際的役割、ということも考慮した上で英語教育に携わってもらえたら、と願っています」(p. 241)という言葉で本書を締めくくっている。これは、慧眼だと思う。「リング・フランカとしての英語」に母語話者は原理的に存在せず、これからの到達目標は“proficient user of English”でなければならないからである。

最後に、本書の狙いは、上智大学英語教授法コースを紹介することにある。そこで、コース内容にも一言ふれておきたい。コースの科目編成を見ると、コア科目、実践科目、理論科目、研究法科目の4つの柱があり、英語教師力を高めるために求められる個別科目が見事に配置されている。例えば実践科目の中にはBilingual Education, Principles and Practice of CLIL, Intercultural Interactionが、そして理論科目にはAffective Factors in TESOL, Sociocultural Theory and SLA, Language and Powerが単なる「話題」としてではなく、具体的な「コース科目」として提供されている。これらの科目は、おそらく上智大学でしか本格的に学ぶことができないものではないかと思う。さらに、研究法科目には、従来の質的・量的研究方法だけでなく、Action Research, Classroom Research, Analyzing Spoken Dataなどが科目として履修できるようになっており、研究者養成の体制も万全である。

評者は、本書を読んで、「これは、上智大学のTESOLコースの概説にとどまることなく、我が国の英語教育の健全な姿を考える羅針盤である」と率直に感じた。ぜひ、一人でも多くの英語教育関係者に読んでもらいたい本である。

田中茂範

(慶応義塾大学教授・ココネ言語教育研究所所長)